

当報告の内容は著者の著作物です。

## 文法研究ワークショップ（第3回）～そこに「ゼロ」はあるのか？

開催日時：平成24年3月27日（火曜日）午後1時30分～午後5時

開催場所：AA研マルチメディア会議室（304室）

### 報告1

報告者名：江畑冬生（日本学術振興会特別研究員）

報告タイトル：サハ語におけるゼロ形態の認定を屈折の義務性から考える

### 報告2

報告者名：麻生玲子（日本学術振興会特別研究員）

報告タイトル：八重山波照間方言の動詞の屈折を考察する

### 報告3

報告者名：石塚政行（東京大学大学院）

報告タイトル：バスク語レクンベリ方言におけるゼロ

コーディネーター：大塚行誠（AA研研究機関研究員）、児島康宏（AA研特任研究員）

### ワークショップ概要：

本ワークショップは、記述言語学を志す学生や研究者が最新の研究成果や調査データを紹介しあうことにより、学生・研究者の交流や最新の情報の共有を促進することを目指して企画されたものである。平成23年5月と11月に行なわれたワークショップに続き、第3回目のワークショップとして、3名の報告者が言語の分析における「ゼロ」の扱いをテーマとした研究発表を行なった。

当初予定されていた大西秀幸氏（東京外国語大学大学院）による報告は、事情により中止になった。次回以降のワークショップで発表を行なってもらう予定である。

会場への出席者は7名。これまでと同様に、ワークショップはUstreamを通じてインターネット上で放送された。それを利用して遠隔地からも4名の参加者があった。遠隔地からの参加者の質問やコメントは、Twitterなどを通して受け付けた。それぞれの報告について活発な質疑応答があった。

地理的にも系統的にも大きく異なるサハ語、八重山波照間方言、バスク語の形態法の分析において「ゼロ」形態を設定することが必要と判断される場合、あるいは不要であると判断される場合について、3名の発表者がそれぞれの分析を提示した。「ゼロ」は音声的な実体がない以上、それを設定するには、義務的な屈折のパラダイムのなかで音形のない形式が存在する、あるいは音形を持つ形態素の異形態として音形を持たない形式があるなど、一定の根拠が求められる。動詞の屈折接尾辞について、江畑氏と麻生氏は屈折接辞の義務性という観点からゼロ形態の有無を論じた。サハ語においても八重山波照間方言において

も、屈折接辞であるが義務的な要素とは言えない場合があり、そのような場合にはゼロ形態を設定する必要はないと考えられる。また、名詞の主格標示について、江畑氏は屈折接辞が何もつかない形式の統語的な機能をもとに、石塚氏は名詞句を等位接続させた場合の接尾辞のふるまいをもとに、ゼロ形式の有無を検討した。

なお、機材のトラブルにより、最初の報告者であった江畑氏の発表の前半部分を放送することができなかった。中継を視聴していた方々にお詫び申し上げます。

報告書作成：大塚行誠（AA 研研究機関研究員）、児島康宏（AA 研特任研究員）

## 報告要旨

**報告 1**：「サハ語におけるゼロ形態の認定を屈折の義務性から考える」（江畑冬生、日本学術振興会特別研究員）

本発表ではサハ語のゼロ形態について屈折の義務性からの考察を行った。発表者は、義務的かつ範疇的な屈折において音形を持つ形態素との意味的対立が見られる場合にのみゼロ形態を認めるという立場を取った。結論として、動詞形態法においては3つのゼロ形態（現在命令，2SG，3SG）を認め、一方で名詞形態法においては述語の場合を除いてゼロ形態を認めない。この立場の前提として屈折接辞の認定基準について議論を行い、補説として形態素タイプの連続体を提案した。

**報告 2**：「八重山波照間方言の動詞の屈折を考察する」（麻生玲子、日本学術振興会特別研究員）

本発表では、まず八重山波照間方言（以下、波照間方言）の動詞形態と機能を概観し、次に従来屈折と考えられてきた接辞が付加されない場合、そこにゼロがあるのかどうか仮説を立てながら考察した。その結果、波照間方言にはゼロの形態素を設定しづらく、波照間方言の屈折接辞のような接辞は、一般的に派生接辞・屈折接辞と定義されるものには当てはまらないことを報告した。

**報告 3**：「バスク語レクンベリ方言におけるゼロ」（石塚政行、東京大学大学院）

一般に、バスク語の格は名詞句の末尾に標示されるが、絶対格は無標である。この絶対格はゼロ標識を持つのだろうか。名詞句の等位接続において、[名詞句+名詞句]+格という構造が許されないことから、バスク語の名詞句は格を含むと考えられる。このことから、二つの相反する結論が導きだせる。もし、パラダイムの一角を占める義務的な要素にはゼロを認めるという立場に立てば、バスク語の名詞句における格は必須の要素なので絶対格にゼロを認定することになる。一方、名詞句における格が必須の要素ならば、格が無い名詞句と、絶対格を持つ無標の名詞句を区別する必要がない。それゆえ、ゼロの絶対格標識を設定することはないともいえる。このように、ゼロの設定はすぐれて理論的な問題であり、どのようなモデルをもとにして、どのような存在者を認めるのかということに議論は大きく左右されるのである。